

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



鎌倉市立大船中で行われた出前授業で、南極で使用される防寒服を試着して教室を歩く田中潤也さん(4・5面へ)

巻頭特集

第3回高校新聞部インターハイ新聞コンクール

最優秀賞に兵庫県立神戸鈴蘭台高校

2・3

学校×企業

鎌倉市立大船中×NECネットエスアイ、東レ、JTBなど

4・5

第13回海外プロジェクト探検隊 高校生6人がカリフォルニア訪問

6・7

第65回読売教育賞決まる 8 第30回AIU高校生国際交流プログラム 9

千葉県八千代市の小中学校に地元販売店が新聞提供 NIE活発に 10 お知らせ・短信 10

リレーエッセー ニューヨーク大アブダビ校「世界をまわる旅」 11

2016.11

Vol.23

第3回インターハイ新聞コンクール 最優秀賞に神戸鈴蘭台高校

全校生徒の顔が見える
新聞作り

全国高校総体（インターハイ）や予選などを取材した学校新聞を顕彰する「第3回高校新聞部インターハイ新聞コンクール」（主催・読売新聞社、後援・全国高等学校体育連盟、全国高等学校文化連盟）で、兵庫県立神戸鈴蘭台高校編集部が制作した「鈴高新聞」と「鈴高ミニプレス」が最優秀賞・読売新聞社賞に選ばれた。

年間117号発行した「巨匠プレス」で全部活動の部員たちを紹介。全校生徒の顔が見える新聞作りを続け、インターハイ本戦に出場する部活動がなくても学校全体に活気をもたらしていることが高く評価された。

このほか、記事や写真、企画などで優れた新聞を作った5校に優秀賞、11校に奨励賞が贈られた。今年は昨年と同数の33校から応募があった。

全体講評 個性派、力作そろそろ

今回も応募作品は力作ぞろいだった。それぞれの紙面からは、インターハイにのぞむ部員

たちの弾む気持ちや、チームをサポートする人たちの思いが伝わってきた。

入賞作には「個性派」が目立った。選手たちに深く取材し、大会に向けて学校全体を盛り上げようという活気あふれる紙面、読者をページの中に誘い込む大胆なレイアウト、動きのある一瞬を斬新な構図でとらえた写真、速報版を精力的に発行するフットワーク……いずれも、読み手に強いメッセージを届けた。

先輩たちがつくった紙面パターンを続けている新聞もみられる。「伝統」を重んじるのはもちろん大切だ。一方で、紙面を進化させていくことも意識したい。小さな囲みの新企画を始めただけでも、ページの表情は随分と変わってくる。（中村明）

◆奨励賞（11校）

福島県立郡山東／群馬県立高崎／群馬県立富岡／埼玉県立松山／向上（神奈川県）／石川県立金沢泉丘／福井県立金津／静岡県立菰山／滋賀県立彦根東／島根県立安来／長崎県立長崎南

【審査員】

審査員長・中村明（読売新聞東京本社紙面審査委員長）／松井孝二（全国高等学校新聞教育研究会会長）／中根淳一（神奈川県立横須賀高校教諭）／秋山哲也（読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局専門委員・前写真部長）

●優秀賞（写真）

鳥取城北（鳥取県）

「城北新聞」第69、70号
「城北かわら版」No.116



ここぞの瞬間切り取る

全国大会に5競技も出場しただけに、紙面からは新聞部の意気込みが随所に感じられた。とくに写真は、ここぞという瞬間をよく切り取っており、キャプションもしっかりしている。選手の名前を入れているのも、地域の方が読んで共感呼ぶだろう。

IH（インターハイ）特集として編集された第70号では、中面見開きで相撲の団体優勝を伝えた。「気持ちでつかんだ団体優勝」の見出しがやや地味だが、優勝が決まった歓喜の選手らをとらえた写真は圧巻だ。ただ、合計12枚の写真掲載はやや多い印象を受ける。写真をしっかり押さえようと取材現場に身を置くことで、足でかせいだ裏方取材も充実した。（秋山哲也）

●優秀賞（企画）

弘学館（佐賀県）

「弘学館新聞」通巻85号



さらなる成長楽しみ

県総体を、A3判5面を使って伝えた。試合経過に加えて、選手、顧問の試合中の不安、喜びなど揺れ動く気持ちをうまく捉えており、「選手が頑張る姿を伝えたい」という記者の気持ちがあふれている。

虎部直前の柔道部を取り上げた「さらば柔道部」は、顧問の「残念な気持ち」を取材して、その心境が伝わる大きな写真を併せて載せている。特筆すべきは、全国の高校の柔道部や相撲部の現状を調べ、「国技全体への問題提起」をしていることだ。社会問題への切り口として、参考にしたい視点であり、素晴らしい記事だ。ほかにも、ウィットの効いた記事があり、今後のさらなる成長が楽しみな新聞である。（松井孝二）

●優秀賞（レイアウト）

長崎県立西陵

横向き紙面が新鮮

「西陵速報」第32、33、34号

「西陵速報」の最大の特徴はメリハリを利かせた紙面だ。各号とも、見出し、記事、写真がバランスよく配されている。勢いのあるレイアウトがインターハイの熱気をストレートに伝えた。紙面を横長に使ったのも新鮮な印象を与えた。

見出しは、メッセージを簡潔な言葉に凝縮させようという工夫の跡がうかがえる。剣道のメイン写真は、動きのある一瞬を切り取った構図で、レイアウトもレベルが高い。

囲みの使い方もうまい。小ぶりの囲み「ちょっと裏話」は紙面の中でアクセントの役割を果たした。このほか、剣道の記事も緊迫した試合の詳細をしっかりと押さえた書きぶり、紙面全体を引き締めた。（中村明）

●優秀賞・ボカリスエット賞（ルポルタージュ） 長崎県立長崎工業

海に出て果敢に取材

総体への意気込みや目標を、運動部すべてに事前にインタビューしている姿勢が光っている。さらに、出場した試合の結果を部長、部員、顧問のインタビューを交えて丹念に取材して記事にまとめた。

「高総体この一枚」のコーナーからは、新聞部員がカメラを片手に試合会場を走り回っている姿が伝わってくる。圧巻は、「新聞部員海に出る」と称して、ヨット競技を同行取材したルポ記事だ。風雨が強い中、ライフジャケットを着用してカメラを濡らしながら悪戦苦闘する様子が迫ってきた。

インターハイ本戦に出場した競技の記事もしっかりフォローアップしている。結果はどうであれ、継続性を生かしている点が素晴らしい。（中根淳一）

「工業っ子」No.132、133、136



●優秀賞（記事）

崇徳（広島県）

「崇徳学園新聞」221号、「崇徳学園新聞」速報版129～162号のうち18号



選手の気持ち引き出す

総体期間中に計19回の「インターハイ新聞」を発行し、県大会や全国大会に出場した各部の活躍をタイムリーに伝えた。どの記事も、試合の展開や選手の思い、心の動きなどをよく取材して聞き出していて、記事に臨場感がある。

また、3年ぶりの「全国制覇」を逃した柔道部、準決勝敗退のサッカー部などの記事では、部員たちの悔しさを伝えるとともに、部員たちの不屈の精神を引き出している点が良い。これらは生徒全体に勇気を与える記事である。部員に焦点を当て、いろいろな形で取り上げているのも良い。「先輩から後輩へ」などの囲み記事もあり、紙面作りの面でも参考になる新聞だ。（松井孝二）

●最優秀賞・読売新聞社賞

「鈴高新聞」
第158、159、160号
「鈴高miniプレス」
第2419～2536号のうち40点
（号外1点含む）



兵庫県立神戸鈴蘭台

最優秀賞に輝いた兵庫県立神戸鈴蘭台
高校の編集部員たち



学校全体に活気

速報版「鈴高miniプレス」を年間119回も発行。総体に臨む各部活動の熱意がよく伝わってくる。

新キャプテンシリーズは部員やマネージャー、前部長などにもインタビューし、キャプテンをクローズアップ。部活動への意識が盛り上がる工夫をしている。総体メンバーシリーズでは、顔写真付きで顧問や他の部活動からのエールを載せるなど企画がとて面白い。

全部活動の部員たちを紹介し、全校生徒の顔が見える新聞作りがなされているところがスゴイ。インターハイ本戦に出場する部活動がなくても学校全体に活気をもたらしている。学校を活性化するための使命を学校新聞が十二分に果たしている好例だ。（中根淳一）





農場ではアーモンドの実を観察することもできた



(上)Olam社社員との交流会では、生の英語にたじろいだ
(中)「日本人とは何か」について考えたUCLAのキャンパス
(下)サンタモニカのビーチで思い切りリラックス

翌日は、三菱商事ロサンゼルス支店をたずね、同支店が取り扱っているチョコレートなどのフェアトレード商品について学んだ。フェアトレードとは、開発途上国の産品を適正な価格で継続購入することで、労働者の生活向上と自立を促す貿易の仕

倫理的消費に関心高める

熱心に見学していた小川夏生さんは「いろんな企業がサステナビリティに配慮すれば世界の将来が明るくなりそう」と感心した様子。村山晶彦さんも「一つ一つの企業が、世界をより良い方向に導こうという意気込みで、社会貢献に取り組めば、貧困や環境問題の解決に役立つはず」と期待を寄せた。

証シールがついた商品が大量に販売されている。一般的商品と比べ1.5〜2倍、値段が高いが、客は普通に購入している。米国では、多少値がはっても環境や貧困問題に配慮した倫理的な商品を購入しようという傾向がある。

カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）で建築・都市

改めて思う、「日本人」とは？

様の文化や言語力を持つ人、日

農業の生産現場取材

ツ用品などのフェアトレード商品が買えるが、認知度はさほど高くない。谷口朋さんは「同じ地球に生きる人間として、消費行動に敏感にならなくては」と、今後は選択的な消費を心がけることを誓った。佐藤詠美さんも「買い物を通じて、高校生でも

市デザイン学科長を務める阿部仁史教授を訪ねる機会にも恵まれた。阿部教授が多人種社会に身を置いて考えた「日本人観」「日本観」について話を伺った。阿部教授は自身の家族を例に語り始めた。妻は米国人の父と日本人の母の間に生まれたが、

本文化に憧れ日本へ深い愛情を持つ人、外国に生まれ育ったため、日本文化も日本語も知らない日系人――。「日本人」を固定的ではなくダイナミックにとらえるほうが楽しいし、いろんな可能性が生まれるのではないか」。阿部教授の持論に一同、思わずうなずいた。

森下瑞紀さんは「アメリカ社会では、多様な価値観や異文化との出会いが新しい発見、アイデアの源泉になっている。留学してみたくなった」と笑顔を見せた。小林龍之介さんも「日本や日本人について考え直すいい機会になった。多様な価値観について今後も考えを深めていきたい」と、気づきを得た様子だった。

高校生6人 カリフォルニアを訪問

日本の高校生を海外に派遣し、ビジネスの最前線を視察したり、国際交流したりした体験を読売新聞紙上などで発信する「第13回海外プロジェクト探検隊」（主催・読売新聞社、特別協賛・三菱商事、後援・アメリカ大使館）が8月24～29日、米カリフォルニア州で行われた。6人の高校生が「食の安心と安全」をテーマに現地の農業生産現場などを巡った。

節水の取り組みに目見張る

一行がまず訪れたのは、カリフォルニア州ヒューロンのトマト農場。三菱商事が資本業務提携する世界的な農産物事業会社「Olam International Limited」（以下、Olam社、シンガポール市場上場）が運営している。7月半ばから9月いっぱいのが収穫期。ハーヴェスターが轟音をあげながら、広大な土地に実ったトマトをどんどん刈り取っていく。パスタソースやサルサソースなどに商品化される加工用のトマトだ。24時間ノンストップで作業が行われ、1日あた

り2000トンが収穫される。乾燥地帯であるにも関わらず、スプリンクラーも農業用水も見あたらない。不思議に思った高校生がOlam社のスタッフにたずねると、「ドリップ灌漑システム」を採用していると

るが、給水は地下約90センチで停止される。それによって、水が無駄に地下深くへ浸透していくことを防いでいる。葉を切り取って水分量をチェックすることもあるという。害虫駆除のため天敵である益虫を放つなどして、より環境に優しい農業を目指していることも説明された。Olam社のビジネス展開はサステナビリティ（持続可能性）への配慮で知られる。環境面はもちろん、安全で健康的な作業空間を労働者に提供しているほか、地域の生活を向上させる社会貢献にも積極的だ。1989年にナイジェリアで創

業し、現在は世界70か国で事業を展開する国際企業に成長したOlam社の成功の背景には、環境と社会へのこうした高い倫理意識がある。

■参加者（敬称略）

森下瑞紀（東京都立小石川中等教育学校5年）
小林龍之介（東京・早稲田大学高等学院2年）
村山晶彦（東京・私立武蔵高校2年）
谷口 朋（福井県立藤島高校2年）
小川夏生（東京・神田女学園高校3年）
佐藤詠美（東京・渋谷教育学園渋谷高校2年）



Olam社が運営する広大なトマト農場を見学した

California
● Huron
○ Los Angeles

■主な日程

8月 24日 米国へ出発
25日 カリフォルニア州ヒューロンなどでOlam社関連の農場や加工工場を視察
26日 ロサンゼルスで三菱商事ロサンゼルス支店、UCLAなどを訪問
27日 ロサンゼルス市内観光、郊外の火力発電施設（DGC社）を見学
28日 日本へ向け出発
29日 帰国

最優秀賞

■国語教育

兵庫県立神戸甲北高校教諭 荒川稔
「エッセイと小説の書き方を教える意義」

■算数・数学教育

広島大学付属中・高校教諭 橋本三嗣
「生徒の活動を重視した数学I『データの分析』の授業実践」

■理科教育

慶応義塾幼稚舎（東京都渋谷区）教諭 相場博明
「化石の魅力を多くの子供達に伝える」

■社会科教育

埼玉県立いずみ高校教諭 華井裕隆
「本当の主権者教育を求めて」

■生活科・総合学習

栃木県小山市立福良小学校 代表・中島利雄
「ふるさと学習を通して、地域を愛し、地域の課題解決に取り組む児童の育成」

■児童生徒指導

堺市立三原台中学校 代表・木田哲生
「不登校対策『みんなく（睡眠教育）』を通じた学校づくり」

■地域社会教育活動

NPO高知市民会議 代表・尾崎昭仁
「子ども・若者の地域社会への参画意識の涵養に関する一考察」

■特別支援教育

千葉県立特別支援学校流山高等学園
主幹教諭 野尻浩
「社会自立を支援する学校設定教科『キャリア・チャレンジ』の挑戦」

優秀賞

■国語教育 福島県郡山市立郡山第五中学校教諭・柳沼智恵／茨城県立水戸工業高校教諭・金沢容子

■算数・数学教育 徳島市立城東中学校教頭・斎藤大輔

■社会科教育 渋谷教育学園渋谷中学校（東京都渋谷区、代表・藤田憲宏）

■生活科・総合学習 埼玉県所沢市立宮前小学校教諭・木下智実

■健康・体力づくり 東京都品川区立第四日野小学校主幹養護教諭・足助麻理

■外国語・異文化理解 東京都立白鷗高校主任教諭・小林翔

■カリキュラム・学校づくり 山梨県南アルプス市立若草小学校長・沢登一浩／群馬県高崎市立乗附小学校（代表・野村裕子）

■地域社会教育活動 兵庫県立姫路特別支援学校分教室教諭・田中博之

■特別支援教育 宮城県立角田支援学校主幹教諭・大坂聡



11月11日に読売新聞東京本社で行われた表彰式で記念の盾を受け取る橋本教諭

第65回 読売教育賞決まる

最優秀賞に8部門8件

学校や地域での優れた教育実践を顕彰する「第65回読売教育賞」は、全国から12部門に160件の応募が寄せられた。最優秀賞は8部門で8件、優秀賞は9部門で11件が選ばれた。この中から、広島大付属中・高校の橋本三嗣教諭と栃木県小山市立福良小の取り組みを紹介する。

データ分析 生徒の興味刺激

広島大学付属中・高校の橋本三嗣教諭（42）は、2010年度から、身近なデータを集めて分析する授業を続けている。学習指導要領の改定で12年度から、高校の「数学I」にコンピュータなどで数値データを整理し、説明する「データの分析」の単元が加えられたが、これを先取りしたもの。

データの読み取り方など基礎的な知識を教えた後、5人ほど

のグループに分けて、生徒たちにテーマを考えさせた。生徒は「サンタがいないと気づいた年齢と一人で寝られるようになった時期」などユニークなデータに着目し、関係を分析。「サンタの存在を信じている人ほど一人で寝られるようになるのは遅い」と仮説を立て、関連があるかどうかを探った。

どんな発言や質問が出るのか予測できず不安もあったが、生徒からは「他の班が推測したことにつつこみを入れるのが楽しい」という声も上がった。

予測できず不安もあったが、生徒からは「他の班が推測したことにつつこみを入れるのが楽しい」という声も上がった。

結城紬でふるさと学習

小山市立福良小学校（中島利雄校長）が1、2年生の生活科や3年生以上の総合的な学習の時間の授業を見直し、6年間かけて地元の産業である結城紬の一連の工程を学ぶ「ふるさと学習」を始めてから5年目を迎える。

蚕の飼育や糸紡ぎ、染色、織りなど10を数える工程はそれぞれ、地元の専門家がボランティアで児童たちに教えている。地元J.Aから孵化させた蚕を無償で譲ってもらったり、織機などの用具を市民から寄付してもらったりと、物質的な面でも地域の協力が欠かせない。

今年は、黄色の繭ができる蚕の飼育に挑戦した。卒業制作の余りで、来年の新生入生に贈るアークセサリーを作ろうと児童たちが発案するなど、自分たちで何ができるかを考える姿勢も身に着きつつある。



AIU高校生国際交流プログラムが30周年

AIU 高校生国際交流プログラム

国際社会で活躍する人材の育成を目標にしたプログラム。AIUが日本での営業開始40周年を記念して1987年に始めた。当初は東京都内の高校生のみを対象としていたが、1993年から全国を対象を広げた。AIUとフリーマン財団の協賛金で運営され、渡航費や滞在費は無料。

渡米プログラム(HSD=AIU High School Diplomats Program)と国内プログラム(USHSD=AIU US High School Diplomats Program)の2つがある。

渡米プログラムは、米国の首都ワシントンやニューヨーク市内にある米政府機関や国連本部などを訪問し、ホームステイや米国の高校生との共同生活も体験する。国内プログラムは、来日した米国の高校生を受け入れ、国内の研修センターで10日間、共同生活を行って日米の文化交流を行う。

米国に派遣された日本の高校生と、日本を訪れた米国の高校生は計約3500人に達する。昨年から読売新聞が後援している全国高等学校英語スピーチコンテストで1位になった岡山県立岡山朝日高のシュレヤス・プラダンさんも、第30回のプログラムに参加した。



パネルディスカッションでプログラムの経験を発表した高校生たち(右の3人)

記念式典で参加高校生が発表

米保険大手AIG傘下のAIU保険会社が高校生国際交流プログラムを開始して30回を迎えたのを記念した、「AIU高校生国際交流プログラム30周年記念式典」が東京都港区のホテルで開かれた。式典のパネルディスカッションでは、今年のプログラムに参加した日本の高校生60人の中から3人が研修の成果を披露した。

発表したのは、国際交流プログラムのうち、渡米プログラムに参加した田園調布学園高(東京都)の伊藤菜さん、筑波大付属高(同)の邱龍一さんと、国内プログラムに参加した学芸大付属高(同)の山本天智さん(いずれも2年)。司会は、第26回のプログラムに参加した渡米

一人ひとりの違いが価値を生むことに気づいた

国際公務員となって世界の人々のために働く仕事につきたい、という夢がある伊藤さん

第31回の募集は12月から

2017年に実施される第31回プログラムの募集は、HSDが12月開始で、締め切りは1月31日。USHSDは2月募集開始予定。

HSDの日程は7月16日から8月7日まで。募集人員は男女各20人の計40人。申込書による1次選考を経て、面接による2次選考を3月に行う。

一方、USHSDの日程は7月27日から8月8日まで。募集人員は男女各10人の計20人。申込書による1次選考を経て、面接による2次選考を5月に行う。詳細はウェブサイト参照。

<http://www.highschooldiplomats.org/contents/download.html>

は「プログラムを通じて」主體的に情報を集めなければいけない、ということ学んだ」と発言。外交官かビジネスマンになって、世界を股にかけて活躍したいという志を抱く邱さんは「一人ひとり、違っているということが価値を生むことに気づき、違いをリスペクトできるようになった」と語った。また、国境なき医師団(MSF)の救急救命医を目指す山本さんは「アメリカ人の高校生たちが真摯に話してくれて、異文化の人との接し方を知ることができた」と述べた。

式典では、キャロライン・ケネディ駐日米大使からの「参加が目的ではありません。これが皆さんの出発点です」というビデオメッセージが披露された後、AIGジャパン・ホールディングスのロバート・ノディン社長兼CEOが「残念ながら、プログラム参加者で現在AIGに勤務している人は5人しかいない」と苦笑しながら、「重要なのはこのプログラムに参加した3500人の人生が参加をきっかけに変わったこと」とプログラムの意義を強調した。

なお、AIU高校生国際交流プログラムは今年、30周年を機に読売教育ネットワークに参加した。

千葉県八千代市の小中学校でNIE活発に

地元の販売店が新聞を提供

子供たちに新聞に触れてもらおうと、千葉県八千代市内の小学校22校、中学校11校では今年5月から、教材として1日計約370部の読売新聞朝刊が地元の販売店から提供されている。各校では、この新聞を活用した取り組み（NIE）が活発に行われている。

記者3人がインタビュー指導

米本南小

10月の新聞週間（15～21日）に合わせ、市立米本南小では21日、読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局の記者3人が講師となり、新聞の作り方などについて解説した。

このうち、高野義雄企画委員は3、4年生を対象に、記者の七つ道具やインタビューの仕方などを説明。教員に氏名や生年月日、学校の先生になった理由などを質問し、取材のお手本をみせた。授業を受けた3年の渡



▲スクリーンの前で、児童に新聞ができるまでを説明する高野企画委員（10月21日）

辺由菜さん（8）は「新聞作りのいろんなことがわかり、興味がわいた」と話した。

この後の給食の時間に、同小の放送委員会の児童が講師3人に突撃インタビューを実施。仕事内容などを聞いた6年の與那嶺黎香さん（12）と後藤里桜さん（12）は「せっかく授業を受けたのだった。校外の人へのインタビューは初めてで、緊張した」と感想を語った。

気になる記事に感想

八千代台西中

八千代台西中の1年生4クラスではほぼ毎日、配布された新聞を生徒が交代で自宅に持ち帰り、気になる記事をチェックする。切り抜いた記事をシートに貼って感想を記入するほか、保



◀気になった新聞記事について感想を発表する八千代台西中の生徒ら（10月13日）

護者にも一言書いてもらい、翌日、クラスで発表している。

国語担当の田中智大教諭（26）は「様々な記事を読んで自分で考え、人に伝える経験を積ませている。保護者に感想を書いてもらうことで親子の会話のきっかけになるし、自分とは違う意見に触れる機会にもなる」と狙いを話していた。

「入試に勝つ新聞記事2017」を刊行

浜学園・駿台・浜学園と、読売新聞教育ネットワーク事務局が共同編集した中学受験用時事問題集「入試に勝つ新聞記事2017」が、読売新聞社から刊行されました。熊本地震やオバマ米大統領の広島訪問、リオ五輪・パラリンピックなど、2017年の中学入試に出題が予想される重要な時事問題について、実際に読売新聞に掲載された記事を収録するとともに、記事のポイントや重要語句、関連項目などについて詳しく解説しています。

「日本の政治」「日本の経済」「世界の動き」「文化と社会」「自然と環境」の5分野を網羅。各章の最後に掲載した一問一答形式の問題や入試予想問題で知識の確認ができるほか、巻末には、切り離して単語カードとして持ち歩ける、重要時事ワードの一問一答カードもついています。

税別1450円。書店、YC（読売新聞販売店）などで購入できます。



読響が教育機関に演奏CDを寄贈

読売日本交響楽団（読響）は音楽教育のサポートの一環として全国の教育機関を対象に特製CD（非売品）を寄贈します。日ごろの演奏を会場でそのまま収めたライブ盤で、歴代の常任指揮者らとの競演を記録した音源としても貴重なものです。寄贈するCDは、グルリット作曲、歌劇「ヴォツェック」（指揮：ゲルト・アルブレヒト＝録音2000年11月）など7点。読響ウェブサイトから応募フォーム、または用紙をダウンロードしてお申し込みください。 <http://yomikyo.or.jp/present2016.php>

【対象】小中学校、高校、大学・大学院（短大を含む）、各種学校、図書館、音楽資料館

【点数】1校・1団体 各種1枚ずつ

※品切れの場合は、在庫があるCDのみ送付

【送料】読響が負担

【募集期間】2016年12月末日まで。

【問い合わせ】読売日本交響楽団事務局 ☎03・5283・5215（平日）

News

海外で学ぶ・リレーエッセー 23

ニューヨーク大学アブダビ校

「NYUADとの世界をまわる旅」

関西学院大阪インターナショナルスクール卒・ニューヨーク大学アブダビ校1年(執筆時)

徐 亜斗香 さん

先日、中東人類学の授業で、米プリンストン大学のアブデラ・ハムディ教授(人類学)がイスラム教徒のメッカ巡礼「ハッジ」を描いた本を読んだ。それ以来、ここニューヨーク大学アブダビ校(NYUAD)での毎日の「旅」が、ある意味私の中での「ハッジ」なのではないかと思っている。

大食堂(「大好きな教室」と私は呼んでいる)では、異文化間の会話が自然に生まれる。N



ニューヨーク大学

アブダビ校

アラブ首長国連邦(UAE)のアブダビ首長国とニューヨーク大学の合意により、2010年に創設された。米主要大学によって運営される包括的なリベラルアーツ、科学分野の中東地域初の大学。

YUAD進学はこの多様性が決め手だった。合計104もの言語を話す113の国籍の生徒が4%の合格率をくぐり抜け、集まっている。決め手のもう一つはアブダビ首長国政府からの一人当たり年間8万ドルの(返済の必要がない)奨学金だった。この中には、授業料、住宅費、本・資料代、給付金のほか、1年に2回日本を往復できる航空券も含まれている。

NYUが最初に海外進出したのは1958年、マドリッドだった。大学の目標がグローバル市民の育成ということもあり、学生は世界NYU全14拠点で最大2学期学ぶことができ、教授が学生を外国に連れて行ってくれることもしばしばだ。授業の一環で、イタリアにルネサンス芸術を学びに行ったし、ウガンダで行われたアフリカの演劇祭も観に行った。バーレーンでは沿岸の開発を視察し、インドではインド武道とダンスの激しいトレーニングも行った。

キャンパスがあるサディアッ

ト島に閉じ込められているような感じに苦しめられることもあるが、その分、大学が様々なイベントを開いてくれる。私は社会研究・公共政策学と演劇学を専攻しているが、世界的に有名な中国人ピアニストのラン・ランがアブダビを訪れた時、彼から直接アドバイスをもらえるマスタークラスに運良く選ばれた。少人数制であるこの大学の特権と運でこのような素晴らしい機会に恵まれたのであった。

もうすぐ大学2年になる。スペイン語を上達させるためのブエノスアイレス校(アルゼンチン)への留学が待ち遠しい。3年次にはアクラ(ガーナ)で発展途上国に住む子供達への支援について研究し、4年次では公共政策学と演劇学のダブル専攻の卒業論文を終わらせる。これまでの人生を覆すような「旅」の後の自分が、どれだけ前と変わったかを確かめるのが楽しみだ。

(会報編集部抄訳 The Japan News 2016年5月22日)



海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロシップの詳細はウェブサイト(<http://ryu-fellow.org>)へ。

インド南部のコラムにある寺院でカタカリ舞踊を練習する徐さん(中央)=本人提供